

翌日、ソローキンはゆいと運命的な出会いをする。

ゆいの英語をロシア語に通訳したのはソローキンである。

二人は互いにひと目見たときから強く魅かれあうものを感じたらしい。高野は日記のなかで後日ゆいから聞いたこのときの気持ちを次のように書きとめている。



挿絵 (N.Takeda)

「蒼く澄みきった情熱的な瞳で見つめられた瞬間、彼女は金縛りにあったかのように相手の瞳を見つめ、たちまち心を奪われてしまった。彼女はこの若き青年将校の瞳のなかに不正と戦争を憎み、自らの信念に忠実に生きようとする男らしく温かな心を感じとっていた」

女学生の慰問から五日後の日曜日、菅井県知事を会長にして地元松山の市長や名士たちがつくった捕虜同情会の集会在道後の旅館で開かれた。高野の人選で祥宗寺から十二名の将校が会に参加した。

同情会の名士たちの多くは生まれて初めて紅毛碧眼こうもうへきがんのロシア人将校とじかに接し、話ができることを子供のように無邪気に喜んでいた。ロシア語の日本人通訳も同席したが、名士たちはうろ覚えの英語で話したがった。英語の通訳として参加していたゆいは、ここでソローキンと再会する。二人は英語で気持ちを確かめあい、逢引きの場所を教会にした。

七月に入って間もない日のことである。

高野は所内で入手したミルスキー中尉の逃亡計画をソローキンに洩らした。深夜、収容所である祥宗寺を脱走しいったん山中に潜み、それから海を目指そうというものである。計画に加担している将兵の氏名まで高野はつかんでいた。ミルスキーを含めて全部で五名、これにソローキンが加わると六名になる。高野はこの逃亡計画を好機と判断し、ソローキンにこの計画に便乗して収容所を脱出するように指示した。脱出後は時期を見て神戸の英国商館へ出向き、参謀本部からの指令を待つてヨーロッパへ渡り、ストックホルムで明石大佐の配下に入ることになる。

高野が話している間、ソローキンの表情は硬かった。

かれは高野の視線をさけて、机の上に組んだ長い指に目を落としていたが、

高野が話し終わると大きな肩でひとつ息をした。

高野は立ち上がり、ソローキンの肩へ手をおいた。

かれの脳裏に満州の戦場にいる息子たちの姿が浮かび、胸中には複雑な思いが去来していた。

やがてソローキンは涙にうるんだ瞳を上げ、ワカレガ、トテモツライデスと片言の日本語でいった。

高野はソローキンに背をむけ、ぎこちなく窓のほうへ歩いた。

かれは教会の二階から雨に煙る市街地の<sup>たたず</sup>佇まいを眺めていた。そしてソローキンの感傷を長引く雨と捕虜生活のせいにした。

この日から二週間後に起きたミルスキー中尉逃亡事件についてはすでに述べたとおりである。

松山の南にある<sup>とべ</sup>砥部村の山中でミルスキーら五名の将兵と別れたソローキン

は夜陰に身をかかし、地図をたよりに山里の小さな<sup>やしろ</sup>社へいった。すると、境内から人影が現われて、ソローキンの胸元へぶつかるようにとびこんだ。ゆいである。

二人はいつまでも強く抱きあい、やがて闇のなかへ姿を隠した。

この夜、ゆいはソローキンを砥部村からひとつ山をこえた<sup>ぐんちゅう</sup>郡中へ連れて逃げた。郡中は伊予灘に面した半農半漁の町である。砂浜と松林が続く海岸線は典型的な内海の風景として人々に愛されている。

話がそれるが、例の捕虜同情会はこの年の九月二十五日にロシア人将校たちを「坊ちゃん列車」でこの郡中の海岸へ招待している。この時の様子は、トルストイの門下生でもあった捕虜のボリス・ダゲーエフが紀行文「郡中行」に書き誌している。将校たちは、「景浜館」という海沿いの旅館で地元の有志たちから心

あたたまるもてなしを受けた。

この「景浜館」はゆいの母方の実家でもあった。

ゆいがソローキンを「景浜館」の裏口まで連れてきたころ夜が明けはじめた。

二人はキラキラ輝きはじめた伊予灘に頬を紅く染めながら松林のなか



挿絵 (Y.Tanaka)

を歩いた。ゆいは目も眩むような仕合せの渦中にいた。海もすぐ傍にいる愛する人もまばゆく輝いている。ゆいは何度も立ちどまり、仕合せを確かめるように愛する人の手をぎゅっと握りしめた。

「景浜館」はその後、次々と人手に渡り木造だった建物も現在鉄筋コンクリートのホテルに様変わりしている。

「殉庵日記」によれば、ソローキンは「景浜館」に三日ばかり滞在している。表向きは英国の商社員を装ったが、人目をはばかり外出することはなかった。

井出兵八の手柄でミルスキー中尉ら逃亡将兵五名が逮捕された翌日の昼すぎ、高野殉庵所長は武田ゆいの訪問を受けた。

極度の緊張のせい、ゆいの顔は蒼白だった。

彼女は両手をそえて一通の封書を高野に差し出した。ソローキンからのものである。

ソローキンは英文でゆいとのことを打ち明け、ゆいと結婚して一緒にヨーロッパへ連れていきたいからどうか力になってほしいと高野へ頼んできたのである。革命ロシアと日本のために一命を捧げる決心をした自分にとって、美しく聡明なゆいは唯一最愛の理解者であり協力者なのだ、とかれはゆいへの思いを率直に告白していたのだった。

手紙から目をあげた高野は、フランス製の応接セットへゆいをみちびき、互いにはすかいに椅子へ腰をおろした。

ながい沈黙のあとで、高野は努めておだやかに訊いた。

「いつ、神戸に発ちますか」

<sup>おもて</sup>面をふせていたゆいは顔をあげ、燃えるような瞳で所長を凝視した。

「明日」

と応えたゆいの声は、さすがに震えていた。

すでにソローキンの手紙を読み終えたときに、高野の決心はついていて、かれはカイゼル髭をなでながら少し間をおいた。それから自分の考えを次のように語った。

「あなたがヨーロッパへ渡るのは、戦争が終わってからがよいと思います。何もかも知ってしまったあなたが、いまヨーロッパへ行くのは危険が多すぎる。あと一年も待てば、かならずこの戦争は終わる。そしたら、ソローキン少尉はきっとあなたを迎えに来るし、私もあなたたち二人の結婚を支援し、祝うこと



挿絵 (S.Nanishi)

ができます」

高野は口にしなかつたが、参謀本部にゆいのことが知れたなら、<sup>とが</sup>咎はゆいの一族にまで及ぶことは火を見るよりもあきらかだったのである。明石工作の成否は、国の命運を左右するという認識が首脳部のあいだに芽生えつつあった。二人を生かすためには、ゆいが自重するしかない。

高野は凛乎<sup>りんこ</sup>としたゆいの眼差しを信じた。聡明なゆいには、高野の苦渋が手取るようにわかっていた。彼女は、口を堅く閉ざすことで、せめてもの抵抗をした。

高野は再びカイゼル髭をなで、時間をやりすごしていた。それから心を鬼にし<sup>さと</sup>諭した。

「情に負けてあなたまでがヨーロッパへ行けば、ソローキン少尉を窮地においこむことになる。おわかりですね」

ゆいはかすかに目でうなずいた。

「神戸にとどまって、ソローキン少尉の活躍を祈りなさい。戦争が終わればかれはまっさきにあなたを迎えに日本へ帰ってくる。あなたなら、そのことを信じていることができる」

ゆいは頬を涙に光らせ、なおこらえていたが、やがて肩をふるわせ<sup>おえつ</sup>嗚咽しはじめた。

さて、読者のみなさんもおわかりのように、この物語はこれで終わるわけではない。

ソローキンがヨーロッパへ発つまでの二人の神戸での生活や明石大佐の配下に入ったソローキンの活躍と戦後の消息、それに、今日、カザノフが調査したロシア帝国外務政策公文書保管所の松山収容所死没者名簿になぜソローキンのことが記載されていたのかなど、なお不明なことや謎が残っており、興味はつきない。また、ソローキンはゆいが待つ日本へ再び戻ってきたのだろうか。二人の行く末を含め、私はいま、「殉庵日記」からこの物語のエピローグに向けて筆を起すことはできる。しかし、私はもともと「物語」を書くつもりではない。事実を語り、その事実でもって、国家と人間の問題についてみなさんと一緒に考えたいのである。前回同様、この物語についての情報をいただけたら幸いである。